

# 北海道男女平等参画チャレンジ賞 平成20年度 懇談概要

[平成21年2月12日(木) / 北海道庁3階知事会議室]

\*\*\* 贈呈式 ~ 高橋知事と懇談 \*\*\*

坂田さん

13,000人いた人口が3,500人までに減少した置戸は、林業のまちだったのですが、林業の衰退で元気のない町になってしまっ。そこで、置戸町の井上町長がちょっと変わったことをやってみようか、外部から人が来てくれたらどうなるだろうということで、今回、お世話になっております。

お陰様で、犬も歩かないといわれた町に外国人がたくさん来るようになりまして、町民の皆さんもだいぶ考え方、見方が変わりまして、いろいろな現象が出てきており、また、いろいろな発想が出てきておりまして、どういった商売に結びつけられるか、置戸の町を自慢していくとどういうことになるだろうかと、少しずつ元気が出てきているところです。

始めたばかりですから、これからどうなっていくのかということが一番大事になってくると思います。

また、いろいろな方面の方にお世話になるとは思いますが、これからは是非よろしくお願ひしたいと思ひます。



レディース100年の森 林業グループ 代表の鷹嘴さん

今日は、名誉ある賞をいただきまして、みんなで大変喜んでおります。ありがとうございます。

私たち、今年で林業グループを立ち上げまして、18年目になります。北海道の女性の林業グループの第1号として、脚光を浴びた時代もありまして、前堀知事からいろいろお話をいただいた事もありました。

その中で18年間続いた林業グループのそれぞれのメンバーが、森の大切さをいかにこれから子どもたちに伝えていくか、これからはメンバーとともにいろいろ考えながら進めて行きたいと思っております。今回は、この賞をいただきまして、さらに力をいただいたととても感謝しております。ありがとうございました。

札幌市立藤の沢小学校保護者と教師の会 会長の星さん

今回、男女平等参画チャレンジ賞という栄えある賞をいただきまして、本当にありがとうございます。私たちは、PTAで放課後、子供を預かろうと、端から難しいことではあったのですが、保育園、幼稚園から、小学校に上がった途端に子どもが放課後、居場所がなくなるというケースが多く、そのため、女性が仕事を辞めたり、非常に不安を感じながら仕事を続ける、あるいは仕事に出られないという状況になっていました。札幌市でもいろいろな事をしてはいますが、こういう小さい小学校は、なかなか手が行き届かなくて。それで、「自分たちでやろう」と考え、一昨年、半年間ぐらい議論、検討をしました。あっという間にできて、うまくいったと思っておりますが、これは、多くの人の思いが、共有されているということを強調しておきたいと思ひます。保護者はもちろん、校長先生をはじめ、学校の先生方も我々の思いに共感していただき、札幌市も、行政の手が届かないところを支援しようと協力してくれて、みんなの思いが一つの方向に向いたというのが、短期間でできた大きな要因だと思ひます。

昨年の4月からスタートしましたが、お陰様で、子どもたちも喜んでおりますし、保護者の方達も喜んでおりますし、安全に過ごすこともできるということで、良かったなと思ひます。

ています。今回、いろいろな意図をもって、この事業をしましたが、やはり、特に女性が、社会に参画できるようにするという、社会をつくるということは、非常に重要だと思っていますし、個人的ですが、私が家事育児をやっておりますので、女性の苦労もわかっているつもりです。そんな思いもあって、少しでも貢献できたらなと思いました。今回、評価していただいて非常に喜んでおります。ありがとうございました。



知事

坂田さんは、今、置戸町に住んでいらっしゃいますが、元々、置戸のご出身ではなくて、マスコミ関係のお仕事をしていらしたとのことですが。

坂田さん

一番はじめは、北海タイムスという新聞社にいました。そのあとは、職を転々としていくとよく言われるのですが、北海タイムスの東京支社にいた時に、旭川の西武百貨店がオープンするので行かないかと声がかかりまして、そこで13年ほどお世話になりました。その後、東京に転勤になりまして、その時に全日空が旭川に乗り入れるということで、営業部長となりまして、旅行に関係したことを続けておりました。最後には、紋別のガリンコ号の常務を担当しておりました。

知事

置戸町の出身ではないからこそ、逆に外から見た置戸のアピールの仕方をいろいろと考えられることができたのかなと思っていたのですが。

坂田さん

全くその通りでして、地元の人が地元の良さをわからないというのは、どこでもそうなのですが、まず、町にお願いしたのは、自分の町を自慢してくださいと。自慢から始められないと観光というのは、生きてこないのだということを講演などでしましたが、当初は、町民の皆さんのとまどいもあったのですが、実際、お客さんが来るようになってからは、女性のグループがお店をつくって、活動を始めるとか、地元の産品を開発しようという気運が出てきたものですから、やっと芽が出てきたというか、これからだと思っています。

知事

そうですね。先般、陸別の「しばれフェスティバル」に行ってきたのですが、陸別町は十勝管内ではありますが、置戸町と隣接する3,000人くらいの町ですが、地域の町、それぞれが、良い地域資源を共同で活用しながらエリアで連携した観光づくりもあるのかなと思います。

坂田さん

おっしゃるとおりで、置戸だけで単独では絶対できないですね。ですから、エリアエリアでやっていかないと。置戸には置戸の役割があって、今、おっしゃられた陸別には、陸別の役割がある、みんなで同じことしてもしょうがない。それぞれの魅力というものを出していけば、エリア全部が元気になっていくというそういう考えですね。

知事

これからもご活躍いただきたいと思います。

坂田さん

ありがとうございます。

知事

鷹嘴さんは、遠く南富良野町からご苦労さまでございます。

女性初の林業グループということで、十数年前に立ち上げられたと聞いております。

当時、輸入品の木材に押されて、環境的には、ややつらいものがあったと思いますが、今世紀に入ってから、環境の時代、とりわけ、去年はG8サミット・環境サミットがあり、北海道の森林、林業も少しずつ元気が出て、活動の環境が変わってきたのかなと思うのですが。

レディース100年の森 林業グループ 代表の鷹嘴さん

そうですね、当初は、私たちは林業が何もわからない中で、森づくりセンターの方たちや役場の方達の力を借りながら、なぜ木が大切なのか、なぜ育てていかなきゃならないのか、そこからのスタートでした。その中で木を育てるということは、私たちは子どもを現に育てて、それと同じじゃないかと思っています。木を育てるのも子どもを育てるのも育て方はそんなに変わらないのではないかと。愛をもって育てればよい子が育つ、愛をもって育てないと子どもは成長しないというところに、育てることの意義というか、大切さを私たちは、木によって教えられ、子どもを育てるのと木を育てるのと一緒にのだからというところから私たちは立ち上がり、始めたという経緯がございます。その中で、枝打ちをし、木の成長を見ながら、やっぱり下刈りをしてあげないと木は育ちが悪いですね。笹の葉に隠れてしまえば、木は育たないのです。枝も打たないと素性が良くなれないし、陽も入れてあげないと木も大きくなりません。そこからが私たちの勉強だったので、それを私たちは今度、子どもたちに教えていって、いかに森林が大事か、森があって空気を育てて水を育ててくれているというところを、実感していただきたいということで、今でも活動をしているところです。



知事

林業というと、とりわけ男性社会の典型のようなイメージがありますが、そういった中で、女性グループのご活動のご苦労などがあったのではないですか。

レディース100年の森 林業グループ 代表の鷹嘴さん

苦労というか、すべてが苦労であって何が苦労なのかというところもあるのですが、苦労したという実感はなくて、学習していくということ、学ぶところからスタートした様な気がします。森に教えられることばかりであって、教えられていく事で一年一年自分たちが成長していったのじゃないかなと思っています。

知事

作業の中で苦労されたことはありますか。

レディース100年の森 林業グループ 代表の鷹嘴さん

作業は、つらいです(笑)。枝打ちなんかは、体が動かなくなりますね。鎌をもって草を刈るということは、普段はしないので、それは男性の方々にお任せしています。ただ、それをやることは、大変な作業だと思います。森林を守るといえるのは大変な作業なんだということを実感しました。そういった苦労はありました。

知事

鶴川の漁協女性部と連携をし、地域間交流をされているようですが。

レディース100年の森 林業グループ 代表の鷹嘴さん

鶴川の方達は、それこそ漁業で生活をしていて、森の木がなくなることによって、脅か

される危機感を私たち以上に持っていらして、そういうところで伝わるものってすごくあるのですね。木を一本、一本、自分たちの手で植えることによって、明日の自分たちの生活にかかってくるというところが違い、やっぱり、私たちはいつも自然の中で、森の中で、何にも感じないで生きていて、そういった実感を得にくく暮らしており、私たちと漁業の人たちの違いが十分伝わってきましたね。

知事

ますますご活躍ください。

レディース100年の森 林業グループ 代表の鷹嘴さん  
ありがとうございます。

知事

私も大昔ですが、子ども二人が小学校の時に子どもを預けて働いたという経験があるので、星さんがおっしゃられたように、保護者の方、教師の方など地域全体で、空き教室を活用した子どもの居場所を作られたのは、女性の味方だなと思っています。いろいろな苦勞があったと思いますが、やっぱり金銭面ですか。

札幌市立藤の沢小学校保護者と教師の会 会長の星さん



一昨年の4月にミニ児童会館のある隣の小学校に6人が越境入学してしまいました。24人、入学するはずが18人になってしまい、それがショックで、とにかく自分達でも始めようとの思いを強くして、いろいろと仕組みを考えたのですが、おっしゃるとおり、お金のことが一番でした。いろいろ考えました。保護者が交代で子どもをみるということもあるのだろうか。ただ、やはりこれは子供を預かるので、保護者のボランティアだけでは安定しないだろうと。それで、

退職された学校の先生や地域の方々を募集して行いました。それは、有償ボランティアという形をお願いすることになりますので、そのための収入をどうするかということが問題でした。PTA会費の値上げや延長利用料金の徴収を行っても足りませんでした。幸いにして、札幌市が、何とかしてあげようという意識もあって、文部科学省のモデル事業、委託事業ということで支援してくれることになりましたので、安定した運営ができています。

知事

小学校全体で、子どもたちは、増えましたか。

札幌市立藤の沢小学校保護者と教師の会 会長の星さん

昨年の4月からのスタートなので、増えてはいないのですが、嬉しいことに今年の4月の入学で他の学区から通わせたいという方が出てきました。ゆくゆくは子どもを持つ方が移り住んで来るような地域になればいいなと考えています。

知事

今は、少子化で、子どもたちを守っていくのは、地域をあげて特に保護者の方が中心になれるのでしょうか、考えていかななくてはならない世の中になってきたなと実感しています。

札幌はまだ、子どもが多い地域ですが、南富良野にしる、置戸にしる、本当に子どもが少なくなりました。何とかしなくてはならないですね。

札幌市立藤の沢小学校保護者と教師の会 会長の星さん

札幌も郊外では、藤の沢もそうですが、昔、開発されたところでの高齢化の進行は、札幌全体よりはるかに早いです。郊外の市街地は、もうすぐ限界集落の水準にいくのではないのかという状況になりつつあります。ほんとに子どもが減っていますね。相当深刻な状況に変わりはないと思います。

知事

これからも頑張ってください。